エドワード・サイードへのオマージュ
——音を「こぼして」はならない、あるいはテンションを保つこと

ホミ・バーバ／W・J・Tミッチェル編
上村忠雄、八木久美子、粟屋利江訳
『エドワード・サイード　対話は続く』
みすず書房　二〇〇九年一〇月

本書はエドワード・サイードの思想的遺産を振り返るために企画された論集である。二〇〇三年九月二五日のサイードの死について、ひとつひとつの批評が深い哀悼の思いを表明している。一七本のエッセイをとおして、長年の友人たちがサイードとの対話の記憶を呼び起こし、かれの思想を再考して、「世俗的批判」や「人文学」といった概念を、あらためて最新の問題に適用して考えているのである。サイードはパレスチナ問題にコミットする情熱的な知識人として、活動家として、「人文主義の抵抗」を唱導していた。なぜ抵抗の語りは「ゆっくりとした」ものではなければならないのかということを、ホミ・バーバは「アダージョ」で考えている。速度がゆっくりとしているということは、部分と全体との、あるいは美的なものとナショナルなものとのあいだのテンション（緊張＝不協和音）を、解消するのではなく、保持するということである。そのテンションの中でこそ、知と正義に関する正しい選択をおこなう可能性が存在し、そのなかでこそ、「何が何といかに」というもっとも大事な問題に対する答えを見つけ出すことができる。このテンションについては、同じようにロジャー・オーウェンとダニエル・バレンボイムも書いている。それは、（異なる民族の間の）調和への願いと、知的格闘についてまわる創造的な不調和への本能的な衝動とのあいだに生じるテンションであった。バレンボイムにとって、サイードの魂は音楽家のそれだった。なぜなら、亡命、政治、統合といった普遍的で重要な点について、サイードは音楽を通じて考えていたからである。音楽を聴くとき、音楽を語るとき、サイードは細部にこの上ないこだわりをみせた。かれは細部の間に相互関係が作り上げられなくてはならないことを、また論理的な思考と直観的な感情がバラバラであってはならないということを理解していた。サイードが用いる統合の原理や包摂という概念も、音楽に由来しており、かれはあらゆる種類の問題に音楽を適用して考えていたのだと、バレンボイムは確信している。

ジャクリーン・ローズが書いているように、シオニズムについての議論におけるサイードのもっとも痛切な訴えのひとつは、「わたしたち」という言葉にある。「わたしたち」とは、「わたしたちは、分断された、意思疎通すら不可能なほどに切り離されてしまった苦悩をもつ二つの共同体としては、共存することはできない」という一文のなかに登場するものである。ローズは、サイードのもっとも好んだグラムシの思考がそこに使われていると強調している。——それは、知の生産において、歴史的な視点と批判とが不可欠であることを知るということである。この種の知は、ひとびとのあいだにある境界を越えていく力をもっている。「求められているのは、批判的意識である。

過去の埋もれた断片を掘り下げることで現在時の強張った言語を批判し、《いまは誰も存在しないところ》に差異を生み出すことである」。そこで問われているのは、他者を知ることであり、わたしたちが「苦悩を共有する」ことのできる他者としてシオニズムを理解するという、複雑で矛盾をはらんだ課題である。「誰にでも苦しみと不公正がある」。こうした知が民族のあいだの境界を越える力をもつということを理解しない限り、中東に前進はありえないと、サイードは語っていた。

サイードは周囲から、彼自身の経験に即して発言するのにふさわしい人物だと、認められていた。ギャーン・ブラカーシュは、ポストコロニアルな都市をめぐるプロジェクトにサイードの参加を期待していたが、その企図は未完のままに終わったという。その彼女によれば、サイードの亡命者としての経験、「アウト・オブ・プレイス」（余所者）という感覚、若き日の記憶のなかにあるコスモポリタニズムのカイロやエルサレムをめぐる省察は、かれのなかで「生きた歴史感覚と手を携えている」のである。

ハリー・ハルトゥーニアンもまた、クラシック音楽という高尚な分野からパレスチナ人の日常的な闘争にまで広がるサイードの著作の懐の深さについて書いている。そのような極めて精力的な活動は、かれ自身に非常に大きな緊張とストレスを強いるものではなかったかと、ハルトゥーニアンは問う。文化批評と政治的実践のあいだのテンションとともに、サイードは、文化的な表象のポリティクスにつねに関心を払いつづけていた。ハルトゥーニアンによれば、一九七〇年代に公刊された三冊の本は、現在の人文科学を席巻している文化論的転回の代表作となったというが、その三冊とは、文化と政治を見る新しい方法を要求したヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』（一九七三年）、フレドリック・ジェイムソンの『政治的無意識』（一九八一年）、そしてサイードの『オリエンタリズム』（一九七八年）であった。

W・J・T・ミッチェルは、サイードの著作における世俗的なものと聖的なものの区別という問題を提起している。世俗的なもの、あるいは「合理的な文明神学」（ヴィーコの言葉）に対置されたものである宗教と神話をめぐっては、サイードにはほとんど構造的ともいうべき嫌悪が存在した。ヴィーコと同様にサイードも、これらの神話やイメージをすべて、人間の作り出したものと見ようとしていたのである。しかし、人間がそれらのイメージの制度の中に住まうということ自体が、すでに非合理的なことである。そこでは人間は、自分が作り出した恐るべき（社会的・経済的・政治的な）システムの中に犠牲者として取り込まれている。そのことにサイードは抵抗していたのだ。そのためにかれは、脱構築やポスト・ヒューマニズム論や基礎づけ不可能性論の示した相対主義と明確に対決したのであった。「それは、かれがデカダンと退廃に抵抗し、失われた大義や流行はずれの観念（つまり、ヒューマニズムや批判）に知識人が責任を負っていることを強調し、支配に奉仕するために利用されている内容空疎な理想を問題視する姿勢の一部をなしている」。ボヴェが指摘するとおり、サイードは、人間の歴史的本性についてのヴィーコの発見に従って、抑圧と不正義への人間の抵抗に「人間の可能性」を見たのであり、まさにそこにこそ、民主主義と自由の場所が作り出されうると信じていたのである。

(Maja Vodopivec)